

大学スポーツ選手における過去を想起した 心理的競技能力評価と妥当性の検討

竹野 欽昭*・伊集 旭寿**・岡野 和輝**・金城 一樹**

(平成26年9月30日受付；平成26年11月5日受理)

要 旨

本研究の目的は、大学クラブ2チーム（サッカー部、バレーボール部）を対象とし、2つの方法を用いて過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性を検討することであった。その第1の方法は、客観性のある過去の事実として競技成績に着目し、「心理的競技能力が高ければ競技成績もよい」という仮説を基に、過去を想起した心理的競技能力評価と競技成績評価との関連性を分析する方法である。また、第2の方法は、第1検査として心理的競技能力診断検査（現在）を行い、その検査から約1年経過した時期に1年前の現在を想起して同様の第2検査（過去）を行い、現在と過去との心理的競技能力の一致傾向を直接的に分析する方法である。これらの検討の結果、第1の方法では、サッカー部で仮説どおりの結果が得られたが、バレーボール部では心理的競技能力評価と競技成績評価の変化に同様の傾向が認められず、過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性の検討に競技成績との関連性を根拠とすることは困難であることが明らかとなった。一方、第2の方法では、第1検査の現在と第2検査の1年前（過去）との心理的競技能力・総合得点の一致傾向が高い結果が得られ、過去を想起した心理的競技能力評価はその当時の心理的競技能力を反映しており妥当性が高いと結論した。第1検査の1年前と第2検査の2年前との総合得点の一致傾向でも高い結果が得られたことから、私たちがこれまでに報告した「大学スポーツ選手における中学、高校、大学期の心理的競技能力評価の試み」において、特に高校期の妥当性は高いものと考えられた。

KEY WORDS

心理的競技能力評価 過去 妥当性

1 研究の背景

スポーツ場面での心理的競技能力を評価する方法として「心理的競技能力診断検査」が使用されている⁽¹⁾。心理的競技能力診断検査は、トップアスリートをはじめ、様々な競技レベルのスポーツ競技選手を対象として実施されている⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾。心理的競技能力診断検査とは、スポーツ場面での実力発揮に関する12の心理的尺度（忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力、協調性）と5因子（競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性）を52項目の質問によって得点化し評価するものである⁽¹⁾。私たちは、心理的要因によってスポーツへの取り組みが消極的な選手を早期に発見し、スポーツを断念するケースを予防・回避するなどスポーツへの積極的な取り組みを支援する方法として新しい心理的競技能力診断検査の活用に取り組んだ⁽⁵⁾⁽⁶⁾。その活用方法は過去を想起して心理的競技能力診断検査を行うことによって、大学スポーツ選手の中学期、高校期、大学期の心理的競技能力を評価し、中学期、高校期と比較して大学期の心理的競技能力が低下している選手を発見しようというものである。

特に中学期から高校期に心理的競技能力診断検査を行う機会が持てなかったスポーツ選手に対して、記憶を基に過去のスポーツ場面を思い出しながら心理的競技能力を評価する方法は、過去と比較して今現在の心理的競技能力がどのような状態かを知る上で有用な方法である。これまでの報告で私たちは、中学期、高校期、大学期の心理的競技能力の変化に山型や谷型などのパターンや統計的な差が認められたことより、過去を想起しての心理的競技能力の評価は可能であると考察した⁽⁵⁾⁽⁶⁾。しかしながら、記憶を基に過去を想起した心理的競技能力評価がどれほど正確に行われているかの妥当性には疑問がある。過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性を検討するには、過去の動かしがたい事実に基づいた客観性のあるデータとの関連性や、今現在とそれをのちほど想起して得られたデータとの直接的な関連性を検証する必要があると考えた。

そこで本研究では、客観性のある過去の事実として競技成績に着目した。競技成績に着目した根拠は、「心理的競

*芸術・体育教育学系 **琉球大学教育学部保健体育専修

技能と競技成績との変化には因果関係があり、「心理的競技能力が高ければ競技成績もよい」という仮説に基づいたものである⁷⁾。心理的競技能力と競技成績の変化傾向が一致しているか、両者の関連性の分析から過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性の検討を試みようと考えた。さらに、過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性を検討する第2の方法として、心理的競技能力診断検査から約1年経過した時期に同じ方法で検査を行い、現在とそれを想起した過去との心理的競技能力の一致傾向を分析することで、直接的な検討を試みようと考えた。

2 研究目的

本研究の目的は、現在と過去2年間の計3期の競技成績の変化傾向が明らかに異なる大学クラブ2チーム（サッカー部、バレーボール部）を対象とし、2つの方法を用いて過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性を検討することとした。第1の方法は、客観性のある過去の事実として競技成績に着目し、「心理的競技能力が高ければ競技成績もよい」という仮説を基に、過去を想起した心理的競技能力と競技成績との関連性を分析する方法である。第2の方法は、心理的競技能力診断検査（現在）を行い、さらにその検査から約1年経過した時期に1年前の現在を想起して同様の検査（過去）を行い、現在と過去との心理的競技能力の一致傾向を直接的に分析する方法である。

3 研究方法

3.1 第1検査（2009年3月実施）

3.1.1 実施期間

心理的競技能力と競技成績との関連性を分析するための第1検査は、バレーボール部を2009年3月5日、サッカー部を2009年3月25日に行った。検査室への集合時間はいずれも午前11時とし、検査開始時間は11時30分とした。

3.1.2 検査対象者

検査対象者は大学男子サッカー部員1～4年次の25名（1年次：11名、2年次：5名、3年次：7名、4年次：2名）と、大学男子バレーボール部員1～4年次およびOBの16名（1年次：5名、2年次：2名、3年次：4名、4年次：4名、OB：1名）とした。検査対象者41名の年齢の平均は21（標準偏差は±1）歳であった。検査対象者はいずれも3年以上の競技歴を有し、入部以来、定期的に練習に参加しレギュラーおよび準レギュラーとして試合に参加している選手であった。なお、OBは留年および大学院進学の原因により、部活動を継続している選手を対象とした。検査対象者には予めインフォームド・コンセント（本検査の趣旨を口頭にて説明）を実施し、本検査の参加について同意を得た。

3.1.3 心理的競技能力診断検査

検査対象者は検査前日に暴飲暴食と飲酒を避け、十分な睡眠をとって検査当日午前11時に検査室へ集合した。また、検査の直前には過度の運動や精神活動を行わないこととした。検査には「心理的競技能力診断検査（DIPCA.3, 中学生～成人用）」を用いた¹⁾。この検査は「苦しい場面でもがまん強く試合ができる」、「大試合になればなるほど闘志がわく」など、52の質問をそれぞれ「1. ほとんどそうでない（0～10%）」、「2. ときたまそうである（25%）」、「3. ときどきそうである（50%）」、「4. しばしばそうである（70%）」、「5. いつもそうである（90～100%）」の5つの中から1つ選択・回答するものである。回答に基づき、12の心理的尺度（忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力、協調性）を得点化し評価した。12の心理的尺度は各20点満点、合計得点（総合得点）は240点満点である。

2009年3月の第1検査では、心理的競技能力診断検査を現在、2年前、1年前の順に行い、現在は現在の状態を、過去の2年前、1年前はそれぞれのシーズンの最高競技成績時を想起して検査を行った。また、検査用紙はすべて現在形で書かれているため、2年前、1年前の検査を行う際は過去形で書かれていると想定して行った。

3.1.4 競技成績の評価

各検査対象者には心理的競技能力診断検査前の検査内容説明時に、2年前、1年前、現在（検査年度）それぞれの最高競技成績を記入用紙へ記述してもらった。心理的競技能力診断検査後に、2年前、1年前、現在の最高競技成績を優れていると思われる順に順位付け（1～3位）を行ってもらい、その順位を競技成績評価として数値化し評価した。

3. 2 第2検査 (2009年12月実施)

3. 2. 1 実施期間

現在 (2009年3月実施) とそれを想起した過去 (2009年12月実施) との心理的競技能力の一致傾向を直接的に検討するための第2検査は、バレーボール部を2009年12月5, 12, 19日, サッカー部を12月13, 19日に行った。第1検査と同様に検査室への集合時間は午前11時とし, 検査開始時間は11時30分とした。

3. 2. 2 検査対象者

検査対象者は第1検査に参加し, 2009年12月の時点で引き続き部活動を継続している大学男子サッカー部員2~4年次の17名 (2年次: 9名, 3年次: 2名, 4年次: 6名) と, 大学男子バレーボール部員2~4年次およびOBの13名 (2年次: 5名, 3年次: 1名, 4年次: 4名, OB: 3名) とした。検査対象者30名の年齢の平均は21 (標準偏差は±1) 歳であった。第1検査と同様に, 検査対象者には予めインフォームド・コンセントを実施し, 本検査の参加について同意を得た。

3. 2. 3 心理的競技能力診断検査

2009年12月実施の第2検査は, 内容や手順については2009年3月に行なった第1検査と同様に行ったが, 1年前は2009年3月実施の第1検査直後に行った試合⁷⁾を想起して行うこととした。その結果, 第1検査の現在と第2検査の1年前および第1検査の1年前と第2検査の2年前のそれぞれ各データが対応し, 心理的競技能力診断検査における総合得点の一致傾向について対応したデータ間の相関分析を用いた検討を可能とした。

3. 3 統計方法

3. 3. 1 2年前, 1年前, 現在における心理的競技能力・総合得点と競技成績評価との関連性の分析

2年前, 1年前, 現在のそれぞれの時期の心理的競技能力・総合得点と競技成績評価との関連性の分析では, 過去の2期から現在に至るまでの競技成績が同じである3, 4年次およびOBの2年前, 1年前, 現在のデータ (サッカー部: 9名, バレーボール部: 9名) を使用した。サッカー部とバレーボール部では2年前, 1年前, 現在の競技成績が異なるため, チーム別にそれぞれの平均値を算出し分析を行なった。なお, 以下の結果に示す平均値のデータは, 平均値±標準誤差で表した。

3. 3. 2 心理的競技能力・総合得点における第1検査 (2009年3月実施) と第2検査 (2009年12月実施) との一致傾向の相関分析

第1検査の現在と第2検査の1年前, 第1検査の1年前と第2検査の2年前の検査対象時期が対応しており, それぞれ心理的競技能力・総合得点の一致傾向について相関関係の分析を行なった。相関関係の分析には, 第1検査と第2検査の計2回の検査に参加した検査対象者30名のデータを使用し, 相関係数と相関の有意性を分析した。

4 結果

4. 1 心理的競技能力・総合得点の変化とパターン

第1検査にて実施した, 過去を想起した2年前, 1年前, 現在における心理的競技能力・総合得点の変化をグラフで表すと, これまでに報告した3つのパターン⁶⁾と新たに見出された1つのパターンの計4つのパターンに分けることができた。図1に, 心理的競技能力・総合得点の3期の変化とその4つのパターンを示した。

サッカー部, バレーボール部とも, パターン1つ目は, 1年前の心理的競技能力が高く, それに比べて2年前と現在の心理的競技能力が低い「山型」, 2つ目は, 1年前の心理的競技能力が低く, それに比べて2年前と現在の心理的競技能力が高い「谷型」, 3つ目は, 2年前, 1年前, 現在の順に心理的競技能力が低下している「右下がり型」, 新たに4つ目は, 2年前, 1年前, 現在の順に心理的競技能力が向上している「右上がり型」であった。それぞれのパターンは, サッカー部が山型9名, 谷型5名, 右下がり型3名, 右上がり型8名, バレーボール部が山型4名, 谷型5名, 右下がり型2名, 右上がり型5名であった。

4. 2 サッカー部, バレーボール部の2年前, 1年前, 現在の3期における心理的競技能力・総合得点の変化傾向

図2に, サッカー部, バレーボール部の2年前, 1年前, 現在の3期における心理的競技能力・総合得点の変化傾向を示した。サッカー部の平均値は, 2年前が 137 ± 12 点, 1年前が 142 ± 8 点, 現在が 149 ± 9 点であった。また, バレーボール部の平均値は, それぞれ 152 ± 8 点, 158 ± 14 点, 165 ± 10 点であった。サッカー部, バレーボール部とも2年前から現在にかけて心理的競技能力・総合得点が向上しており, 右上がり型の変化傾向を示した。

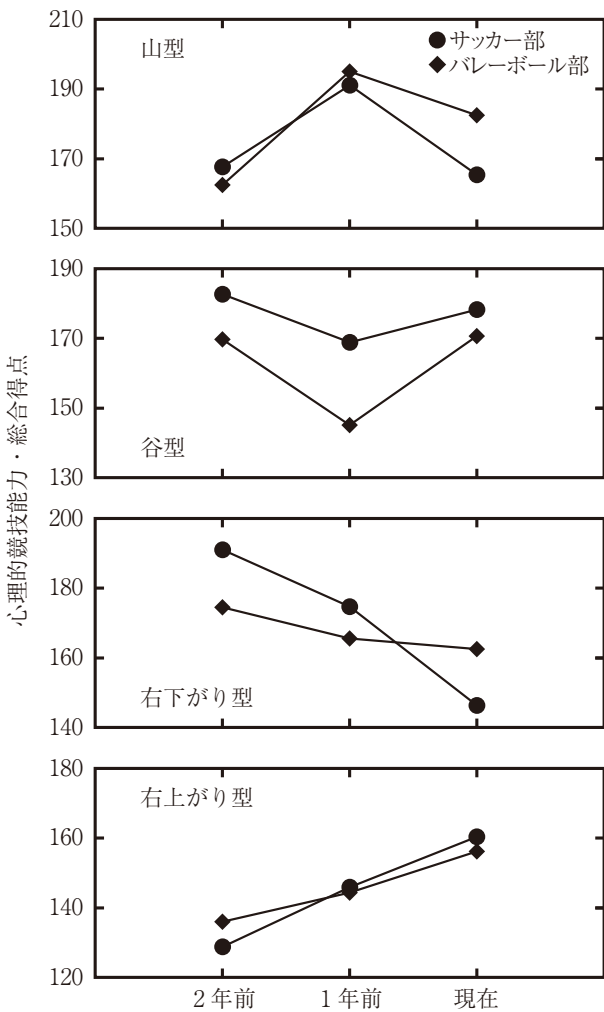


図1 サッカー部、バレーボール部の2年前、1年前、現在の心理的競技能力・総合得点の変化とパターン

各データは、サッカー部が山型9名、谷型5名、右下がり型3名、右上がり型8名、バレーボール部が山型4名、谷型5名、右下がり型2名、右上がり型5名のそれぞれの平均値のみで示した。

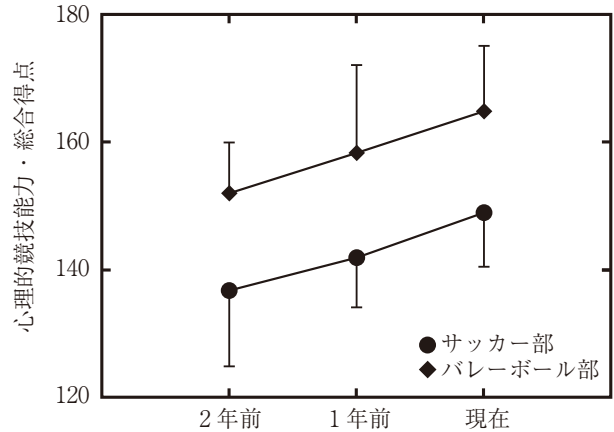


図2 サッカー部、バレーボール部の2年前、1年前、現在の3期における心理的競技能力・総合得点の変化傾向

各データはサッカー部9名、バレーボール部9名のそれぞれの平均値、エラーバーは標準誤差で示した。

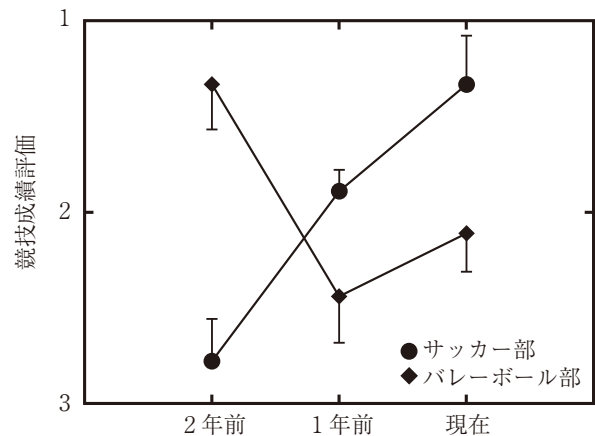


図3 サッカー部、バレーボール部の2年前、1年前、現在の3期における競技成績評価の変化傾向

各データはサッカー部9名、バレーボール部9名のそれぞれの平均値、エラーバーは標準誤差で示した。

4. 3 サッカー部、バレーボール部の2年前、1年前、現在の3期における競技成績評価の変化傾向

図3に、サッカー部、バレーボール部の2年前、1年前、現在の3期における競技成績評価の変化傾向を示した。2年前、1年前、現在の競技成績を各検査対象者が1～3位の順位付けによって評価を行っているため、数値が小さいほど競技成績評価が高いことを示している。サッカー部の平均値は、2年前が 2.8 ± 0.2 、1年前が 1.9 ± 0.1 、現在が 1.3 ± 0.3 であった。バレーボール部の平均値は、それぞれ 1.3 ± 0.2 、 2.4 ± 0.2 、 2.1 ± 0.2 であった。サッカー部は心理的競技能力・総合得点の変化傾向と同様に、競技成績評価が2年前から現在にかけて高まる傾向を示した。一方、バレーボール部は心理的競技能力・総合得点の変化傾向とは異なり、競技成績評価が2年前から1年前へかけて低下し、1年前から現在にかけてわずかに上昇するという傾向を示した。

4. 4 第1検査と第2検査との心理的競技能力・総合得点の相関分析

図4に、第1検査と第2検査との心理的競技能力・総合得点の相関関係を示した。図4aに第1検査の現在と第2検査の1年前、図4bに第1検査の1年前と第2検査の2年前について、それぞれの心理的競技能力・総合得点の相関

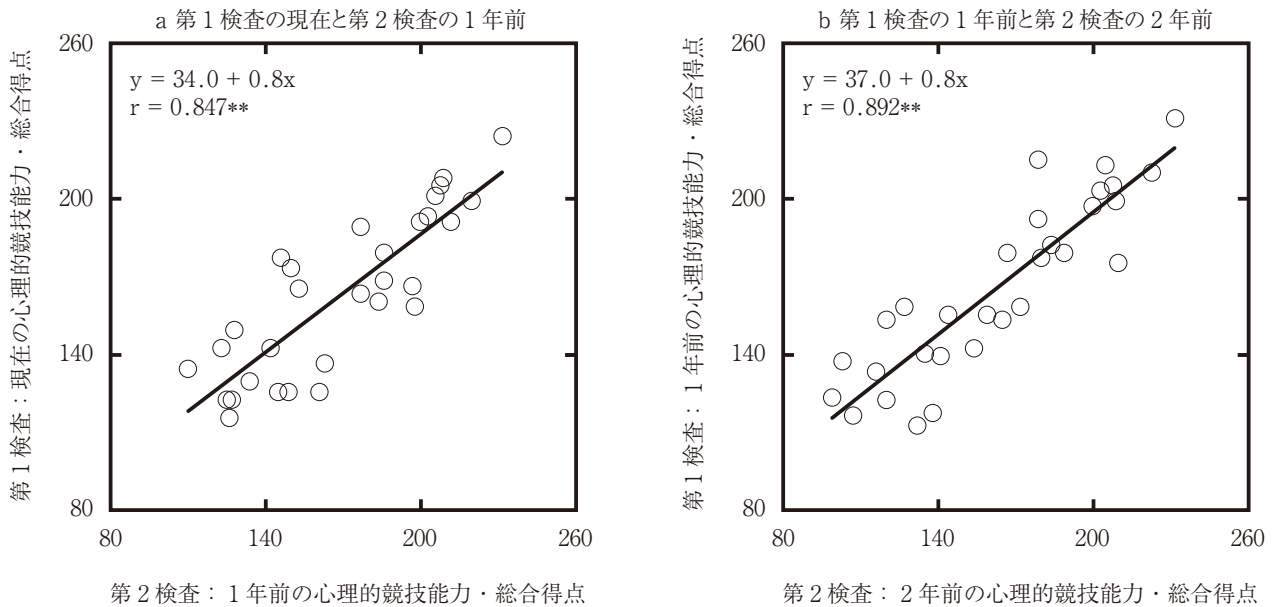


図4 第1検査と第2検査との心理的競技能力・総合得点の相関関係

**は1%水準 ($p < 0.01$) で有意な相関関係があることを示す。

関係を示した。対応する第1検査の現在と第2検査の1年前との心理的競技能力・総合得点の相関係数は $r = 0.847$ （寄与率72%）を示し、統計的に有意な正の相関 ($p < 0.01$) が認められた。また、対応する第1検査の1年前と第2検査の2年前との心理的競技能力・総合得点の相関係数は $r = 0.892$ （寄与率80%）で有意な正の相関 ($p < 0.01$) を示し、図4a、図4bとも高い一致傾向が認められた。

5 考察

本研究の目的は、大学クラブ2チームを対象とし、2つの方法を用いて過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性を検討することであった。第1の方法である、心理的競技能力評価と競技成績評価との関連性による検証では、2年前、1年前、現在の大学3期の競技成績が同じである3、4年次およびOBのデータを用いて検討した。サッカー部では2年前から現在にかけて、心理的競技能力・総合得点の上昇に伴い、順位付けにより評価した競技成績評価も上昇しており、仮説どおり心理的競技能力と競技成績との関連性が強いという結果であった。一方、バレーボール部では、サッカー部と同様に心理的競技能力・総合得点は年ごとに上昇していたが、競技成績評価は2年前から1年前へかけて低下し、1年前から現在にかけてわずかに上昇する傾向を示し、両者に一致した傾向が認められなかった。これらの結果より、過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性を検討するにあたって、競技成績との関連性を根拠とすることは困難と結論した。第2の方法である、第1検査と第2検査による直接的な検証では、第1検査の現在と第2検査の1年前（過去）との心理的競技能力・総合得点の一致傾向について相関分析を用いて検討したところ、相関係数は $r = 0.847$ （寄与率72%）を示し、統計的に有意な正の相関関係 ($p < 0.01$) が認められた。また、第1検査の1年前と第2検査の2年前についても同様に相関分析を行ったところ、相関係数は $r = 0.892$ （寄与率80%）で有意な正の相関関係 ($p < 0.01$) が認められた。これらの第2の方法の結果から、過去を想起した心理的競技能力評価はその当時の心理的競技能力を反映しており、私たちがこれまでに報告した「大学スポーツ選手における中学、高校、大学期の心理的競技能力評価の試み」において、特に高校期の妥当性は高いものと考えられた。

これまで私たちは、心理的・精神的要因によりスポーツを断念するケースを予防・回避し、スポーツへの積極的な参加を支援する方法として心理的競技能力診断検査の新たな活用方法を試みてきた⁽⁵⁾⁽⁶⁾。その活用方法は、過去を想起して心理的競技能力診断検査を行うことによって、大学スポーツ選手の中学期、高校期、大学期の心理的競技能力を評価し、中学期、高校期と比較して大学期の心理的競技能力が低下している選手を発見しようというものである。

この活用方法を実施し、3期の心理的競技能力の変化を山型、谷型、右下がり型の3つの変化パターンに分類できたことを報告した。このように、検査対象時期を中学から高校、高校から大学の、学校の移行期に着目して検査を実施してきたが、本研究では1年毎のシーズンの移行期に着目し、これまで報告した記憶を基に過去の心理的競技能力を評価するという活用方法を用いて、現在と、過去の2年前、1年前の計3期の心理的競技能力評価を実施した。その結果、図1に示すように、これまでに分類した山型、谷型、右下がり型の3つのパターンに加え、新たな変化パターンである右上がり型のパターンを検出することができた。右上がり型のパターンは、2年前から1年前へ、1年前から現在へと心理的競技能力・総合得点が上昇しており、理想的な変化パターンと考えられた。

本研究の目的は、2つの方法を用いて過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性を検討することであった。これまでの私たちの報告では、中学期、高校期、大学期の心理的競技能力の変化に、山型や谷型などのパターンやその変化に統計的な差が認められたことより、過去を想起しての心理的競技能力評価は可能であると考察してきた。しかしながら、これらの考察は心理的競技能力診断検査内のみで得られた結果に基づいたものであり、過去の心理的競技能力評価がどれほど正確に行われているか、その妥当性には依然疑問があると考えた。そこで、本研究では、記憶を基に過去のスポーツ場面を思い出しながら心理的競技能力を評価する方法について、2つの方法を用いて妥当性を検討することとした。その第1の方法は、過去の動かしがたい事実に基づいた客観性のあるデータである、競技成績との関連性を検証することにより、過去の心理的競技能力評価の妥当性を検討する方法である。これまで、心理的競技能力と競技成績との関連性について多くの報告がなされており⁽²⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾、競技成績や競技レベルの高い選手では心理的競技能力が高い傾向にあることが報告されている。これらの報告から「心理的競技能力が高ければ競技成績もよい」という仮説を立て、過去を想起した心理的競技能力と競技成績の変化傾向が同様であるか、その対応を検証することにより妥当性の根拠を得ようとした。さらに、第2の方法として、心理的競技能力診断検査（現在）を行い、その検査から約1年経過した時期に1年前の現在を想起して同様の検査（過去）を行い、現在と過去との心理的競技能力の対応を直接的に分析することで、その一致傾向から妥当性の根拠を得ようとした。

第1の方法では、2年前、1年前、現在の大学3期の競技成績が同じである3、4年次およびOBのデータを用いて検証した。サッカー部では2年前から現在にかけて、心理的競技能力・総合得点の平均値の上昇に伴い、順位付けにより評価した競技成績評価の平均値も上昇しており、過去を想起した心理的競技能力評価と競技成績評価の変化が同様の傾向を示した。一方、バレーボール部では、サッカー部と同様に心理的競技能力・総合得点の平均値は年ごとに上昇しているものの、競技成績評価の平均値は2年前から1年前へかけて低下し、また1年前から現在にかけてはわずかに上昇する傾向を示しており、心理的競技能力評価と競技成績評価の変化傾向が異なる結果であった。客観性のあるデータである競技成績と同様の傾向を示すことによって、過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性の検討を試みようとしたが、本研究のバレーボール部の結果より、競技成績との関連性を根拠とすることは困難と考えられた。本研究では競技成績を数値化する方法として、大学3期の競技成績を1～3位の順位付けにより評価するシンプルな方法を用いた。データ分析対象としたサッカー部9名、バレーボール部9名とも、記述した2年前、1年前、現在（検査年度）の最高競技成績はそれぞれのチームで同様であったが、その順位付け評価には個人差が見られた。競技成績は過去の客観的事実であるが、各シーズンのチーム競技成績の順位付け評価には本研究で個人差が見られたように主観が含まれることから、過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性の根拠としては不十分であったように考えられた。

第2の方法である第1検査と第2検査による直接的な検証では、対応する第1検査の現在と第2検査の1年前（過去）との心理的競技能力・総合得点の一致傾向について相関分析を用いて検証したところ、相関係数は $r=0.847$ （寄与率72%）を示し、統計的に有意な正の相関関係（ $p<0.01$ ）が認められた。この結果より、今現在の心理的状態で行った心理的競技能力診断検査と約1年後にその当時の試合を想起して実施した心理的競技能力診断検査との総合得点に高い一致傾向が認められ、約1年前の過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性は高いと考えられた。また、第1検査の1年前と第2検査の2年前についても同様に相関分析を行ったところ、相関係数は $r=0.892$ （寄与率80%）で有意な正の相関関係（ $p<0.01$ ）が認められた。これらの結果から、第1検査の現在と第2検査の1年前との「現在と過去」の関係だけでなく、第1検査の1年前と第2検査の2年前との「過去と過去」の関係についても心理的競技能力・総合得点の高い一致傾向が認められ、過去を想起した心理的競技能力評価はその当時の心理的競技能力を反映しているものと考察した。第1検査の1年前と第2検査の2年前との「過去と過去」の関係ではあるが、2年前に遡っての過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性の高さを本研究は示唆しており、私たちがこれまでに報告した「大学スポーツ選手における中学、高校、大学期の心理的競技能力評価の試み」において、特に高校期の妥当性は高いものと推察した。

大学スポーツ選手をメンタルコンディショニングの観点からサポートする場合は、生活環境やスポーツ活動環境などが著しく変化する高校期から大学期への移行時期に注視することが重要である。そのため、高校期から大学期までの期間に心理的競技能力診断検査を活用し、心理的競技能力が低下傾向にある選手に対してスポーツ活動への積極的な参加を支援していくことは有用と考えられる。しかしながら、一般のほとんどの大学スポーツ選手では、高校期に心理的競技能力診断検査を受ける機会がないのが現状である。本研究では、2年前の心理的競技能力評価までの検証ではあるが、記憶を基に過去のスポーツ場面を思い出しながら心理的競技能力を評価する新たな活用方法の妥当性を確認することができた。過去を想起した心理的競技能力評価は高校期から大学期への移行時期には対応できることが推察され、高校期に心理的競技能力診断検査を行う機会が持てなかったスポーツ選手に対して有用な方法と結論した。

本研究の今後の課題として、過去を想起した心理的競技能力評価の妥当性がどれほど過去に遡って得られるかを検討することが挙げられる。本研究では、2年前の心理的競技能力評価までの推察にとどまっており、中学期を想起しての心理的競技能力評価の妥当性は実験計画を工夫して今後検討の必要性があると考えた。また、実際に「大学スポーツ選手における中学、高校、大学期の心理的競技能力評価」を今後いかに応用していくかの課題も挙げられる。総合得点の変化パターンが「山型」、「右下がり型」のように、高校期に比べて現在の心理的競技能力が低下傾向の選手を発見し、どのような心理的サポートを行っていくかという問題である。今後は高校期と比較して現在の心理的競技能力が低下傾向の選手やチームを対象としたメンタルトレーニング・プログラムを検討し、「大学スポーツ選手における中学、高校、大学期の心理的競技能力評価」とメンタルトレーニング・プログラムを組み合わせたメンタルサポートによって、実際に「心理的競技能力が改善するのか」、その有効性を検討していく予定である。

引用文献

- (1) 徳永幹雄・橋本公雄(2000) 心理的競技能力診断検査用紙(DIPCA.3). トーヨーフィジカル発行.
- (2) 徳永幹雄・吉田英治・重枝武司・東健二・稲富勉・斉藤孝(2000) スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差, 競技レベル差, 種目差. 健康科学22: 109-120.
- (3) 徳永幹雄(2001) スポーツ選手に対する心理的競技能力の評価尺度の開発とシステム化. 健康科学23: 91-102.
- (4) 立谷泰久・今井恭子・山崎史恵・菅生貴之・平木貴子・平田大輔・石井源信・松尾彰文(2008) ソルトレークシティー及びトリノ冬季オリンピック代表選手の心理的競技能力. Japanese Journal of Elite Sports Support 1: 13-20.
- (5) 竹野欽昭・金城一樹(2009) 大学スポーツ選手における中学, 高校, 大学期の心理的競技能力評価の試み. 琉球大学教育学部紀要74: 27-29.
- (6) 竹野欽昭・金城一樹・伊集旭寿・岡野和輝・青山健吾・上原奈保子・重見有紀・手登根良太(2012) 大学スポーツ選手における過去を想起した心理的競技能力評価と中学, 高校, 大学期の心理的競技能力変化に影響を及ぼす心理的要因. 琉球大学教育学部紀要81: 101-110.
- (7) 竹野欽昭・岡野和輝・伊集旭寿・金城一樹(2014) 心理的競技能力と競技パフォーマンスとの関連性 -バレーボールおよびサッカー競技における初期的検討-. 上越教育大学研究紀要33: 259-268.
- (8) 古谷学・谷口幸一(1993) 学生ソフトテニス選手の心理的競技能力に関する研究. 九州体育大学研究7(1): 29-38.
- (9) 岡本昌成・高津浩彰・高田正義・寺田泰人(1996) 社会人ラグビー選手の心理的競技能力について-競技成績・ポジションによる比較-. 愛知工業大学研究報告A基礎教育系論文集31: 23-26.
- (10) 半田洋平・高田正義(2004) 高校ハンドボール選手の心理的競技能力について-チーム内における競技力の違いから-. 愛知学院大学教養部紀要52: 37-43.

Evaluation of the validity of psychological competitive ability test recalling the past for college athletes

Yoshiaki TAKENO* · Akito IJU** · Kazuki OKANO** · Kazuki KINJO**

ABSTRACT

We evaluated validity of psychological competitive ability test recalling the past. 30 college athletes tested psychological competitive ability recalling the past game (recalling test) after almost a year of the real test. In the result, total score on psychological competitive ability test in recalling test was highly correlated with the real test ($r=0.847$, $p<0.01$). Thus, high degree of match between real test and recalling test suggests that recalling test can have high validity to assess past psychological competitive ability of college athletes.